

森田慶一『建築論』の「全一」概念について —ヴァレリー『エウパリノス』との関わり—

市川秀和（福井工業大学）

森田慶一（1895～1983）については、大正9年に結成した「分離派建築会」の主要メンバーであり、また古代ローマのウィトルウィウス Vitruvius による『建築十書 De architectura libri decem』をラテン語原典から邦訳出版（昭和18年）した西洋古典学者であることも、既に周知のことであろう。さらに京都大学の建築学科創設期以来の教員として、そのウィトルウィウスに基づく建築論研究と古典的建築作品の制作活動、そして門下生との学術研究から増田友也（1914～1981）等へと戦後継承された一学統の形成、すなわち所謂「京都学派の建築論」を先導したことは、他の京都学派との関係からも注目値する。

さて森田の五十年以上に及ぶ幅広い研究成果の集大成が、晩年の1978（昭和53）年に東海大学出版会より刊行された主著『建築論』であり、34年後の現在まで増刷されている。本発表は、かかる『建築論』の体系的内容を骨格づける独特な用語「全一」に着目し、この概念の意味や成立などをめぐって、特に同書所収の森田訳「ヴァレリー『エウパリノス』または建築家』（1923）」との関わりから考察する。

まず森田の基本視座は、ウィトルウィウス建築書の原典批判と独自の解釈を通してギリシア古典世界へと遡源することから創り出された。つまり「建築 architectura」の3つの立脚点 ratio 「美・用・強」のうち、特に「美」の6概念の相互関係を考究するために、ルネサンスのアルベルティ等との比較ではなく、ギリシアの原初から敢えて問い直し、古典建築の本質的究明を試みた（博士論文：昭和7年）。こうしたウィトルウィウス—ギリシア世界に根ざした森田の前期思索は、戦時中のヴァレリー『エウパリノス』邦訳作業の中でいっそう深められ、主著『建築論』構築へ向けた後期思索が着実に始まった。

なお日本のヴァレリー受容は、昭和初期の哲学・美学・仏文学等の分野で活発化したものの、『エウパリノス』に関するものは極めて僅かであり、一つの独立した論考としては、昭和23年に森田の発表した「ヴァレリーの建築論」（『サンス—フランス学術研究—』第4冊所収）が最も早い一つであろう。

この文学作品について森田の言葉によれば「建築の全体像をみごとな筆致でわれわれに示し」、「建築を考えさせる導火線とさえなったもの」であった。森田は、ヴァレリーへの美学・仏文学での課題を踏まえつつも、ウィトルウィウス—ギリシアに通底した建築論的アプローチで一貫して読み解いた末に、この仏語テキストから建築的本質を性格づける新概念「tout（全一）」を見事に抽出した。こうして森田に於けるウィトルウィウスからヴァレリーへの独自の思索展開があつてこそ、晩年の『建築論』に結実したと言わなければならない。さらにヴァレリー以後の森田の後期思索は、同時代のフランス人建築家ペレー（Auguste Perret 1874～1954）の思想（建築は柱を歌わせる芸術である）とも共鳴していたのである。